

ひとりの酒場で呑む時は

——渡辺 利夫

昭和14年生まれ。故郷の甲府が終戦の年の7月に大空襲を受け、母の里に逃れ、そこで少年時代を過ごした。

空きっ腹を抱え、食えるものは何でも食べて生き延びた。

大学に入ったのが昭和33年、東京でも戦後の焼け跡があちこちらにあった頃である。

このあたりまで、旨いものなど食った記憶はない。いや、食ったものは何でも旨かったと

産家の子弟ならいざ知らず、私と同じ世代の者なら大抵が似たり寄ったりの生活だったよ



うに思う。

大学を卒業してサラリーマン生活を3年送った。卒業の翌年が東京オリンピック、高度経済成長の真っ直中、世の中は急速に豊かさ

を増していた。

初めて給料というものをもらった。大学時代の親友と2人で少々気張って築地の寿司屋にいった。中トコの刺身が、わが人生最初の高級な食い物だった。

私の少年時代、外野から隔てられた山国の甲府では生(なま)ものなど口にすることはできなかった。

今でも会食などの時には、出されるものは何でも食す。しかし、仕事に疲れてひとりの酒場で呑む時には、足は自然と目黒駅近くのお気に入りの寿司屋に向かっている。

(拓殖大学学事顧問)